

夫より奥之方山裾畑地に案内致ス右近邊にも新規
切開候場所二ヶ所有之候ニ付最前之通申談承伏い
九す

一持地ハ先ハ是迄ニ候哉

一脇濱之方ニ少く持地有之候得共最早日暮ニ相成候ニ
付如何可仕哉

一明朝見分可致太義ニ候

右ニ而畢ル

戌二月二十七日於小笠原島袋澤

ゼイボレ
ジヨイボレ
ジヨイボレ
ジヨイボレ
ジエークニ對話書

一過日此方ニ而其方畑地分界に印杭取建候處行違有之候間

今日尙取調澤芋作付有之候場所而已ニ取極界杭建直一候
間左様相心得可申候

ウエフ一承知仕候

一セイボレ義過日者不快之趣ニ候處早速快復大慶存候乍然
病後遠路之處出張格別太義ニ可有之候

セイボレ一追く快氣ニ而兩三日已前より歩行も出來候様相成申
候

ジエーク一此場所西山裾より東山裾迄凡壹丁餘私持地ニ有之候
一兼而申談置候通此所も手入無之地面故已後持地ニ相渡候

義難相成候

同一三ヶ年前迄ハ作付仕候

一左候得者少くは痕跡も可有之處一向手入致候様子も無之

假令曾而植付候とも當時荒地相成候上者持地ニ難渡既ニ
ウエフ持地も自分作付有之候地面而已トて其餘者悉く取
上申候

一私三ヶ年前迄作付致候ニ相違無之且當處者私草創ニ
而開墾いふ候間何卒私持地ニ被仰付候様奉願候
一眼前荒地ニ相成居候上者何分持地ニ相渡兼候併明地ニ致
置候節ハ此方入用之節迄耕作可爲致候

一シエーク義ハ當時私方同居候間當地面御取上相成明
地之節等御貸渡被下候ハ、差當り差支ハ無之候得共
追而當所ニ歸住致候節ハ持地無之候而者當惑仕候
一夫ハ規則書ニも有之候通り開墾相願度節ハ猶願出可申其
節地處役人より相渡可申尤此地ニ限り不申此方差支無之

場所可渡遣候

一^{ジエーク}如仰よて宜敷候
一追而家屋等取建候節願出可申候
一承知仕候

此時セイボレ持場ノ案内致ス

一^{セイボレ}此より此迄北袋澤中央地面壹町四方程妻之持地トて
此より此迄同所東北之方同斷ハ子供之分ニ有之候
一一体之筋合妻之持地ハ別段無之筈ニ候

一^同英米國風習ニてたどハ三百兩所持致居候者死去候
得者子供等ハ貳百兩差遣一跡百兩ハ妻之物ニ相成
申候私ニおわて他念無之候得共五人の子供等ニ如何
被成下候哉且存分之義相願候義ニ者無之候得共毎年

食候丈之澤芋作り候場所さへ被下候ハ、宜候

一尤よ老候得共只今シエークに申談候如く荒廢候處ハ持地
ニ者渡兼候既ニウエフ作付致候場所一見致候節も澤芋植
付有之候得共作付之芋丈ハ差遣其他ハ持地ニ不相成績申
談候場所も有之乍然先般其方ハ引合置候如く妻先夫と申
者ハ最初當所切開き格別骨折候由も有之候間右者持地ニ
も可渡遣旨申談置候得共妻事も當時ハ孀居致居ニ無之其
方ニ再嫁之上ハ則其方之撫育を受可申義ニ付別段持地ハ
無之筈ニ付右地處者難相渡乍然前段之譯柄も有之事故出
格之勘辨を以先夫子供之爲ニ殘一置候場所丈老持地ニ可
渡遣候

一難有奉存候其他之地面ニ而も當時澤芋作付有之分ハ

收穫致不苦候哉

一不苦候且此後とても此方入用無之打捨置候内ハ尙引續作
付致候ても宜敷候

一同只今申上候子供之爲殘一置候土地ハ彼北之方山裾印
杭より南山裾印杭迄凡壹町餘東之方も同様山裾迄凡
壹町餘有之候

一東北山裾ハ流泉を限り南山裾ハ道筋丈相除候而分界相定
可申候

一同承知難有奉存候

一其方持地老只今申入候通り相心得且近日繪圖取調調印爲
致可申候間左様相心得可申候

一同承知仕候

一此よりシヨ―シ持地をも見分致候間其方も立會可申候
一承知仕候

一過日旭山下よて家鴨紛失之由申立候處其後此方船乗組之
者右山中ニて家鴨見懸候者有之若くや右紛失ノ鳥ニ者無
之哉

一右山中よて三羽御見懸有之由承り申候多分紛失之鳥
ニ可有之乍然其餘ハ燒火之跡も有之且皮毛も其邊
取散く有之候間燒喰候義と存候

一此山中ふて鷄之聲相聞候右ハ日本ふて三百年前相放く候
由記録ニ有之右鳥蕃殖致候義と存候

一彼之鷄ハシヨ―シ先年此所ニ住居致候節相放く候鳥
ニ有之候

一此とも不限所く山くふて見懸候間シヨ―シ相放く候鳥と
も不被存候

此時シヨ―シ持地ニ案内致ス北袋澤海岸破家有之
場所也

一此河之外ニも抽樹并芭蕉植付有之持地ハ河より西之
方海邊迄ニ凡壹町半程有之候其外南北山頂ニも所く
畑地有之候

一此地を過日申出候カナカ人より買上候地所ニ候哉
一如仰よて此邊畑地家屋等不殘引纏め百四十ドルふて
買受申候

一畑地家屋等如是荒廢致居候上を已前之比例ニ者難相成候
一仰之通り荒廢致居候間五十ドルヲルニ申上候義ニ有

之候

一先頃より毎々申立候趣も有之候得者五十ドルヲルよて買
上可申右代料受取書并カナカ人より買上候節之證書相添
差出可申候

一^同カナカ人證書ハ過日御本船ハ差出置申候

一左候ハ、御買上相成代料受取難有旨書面差出可申候

一^同承知仕候

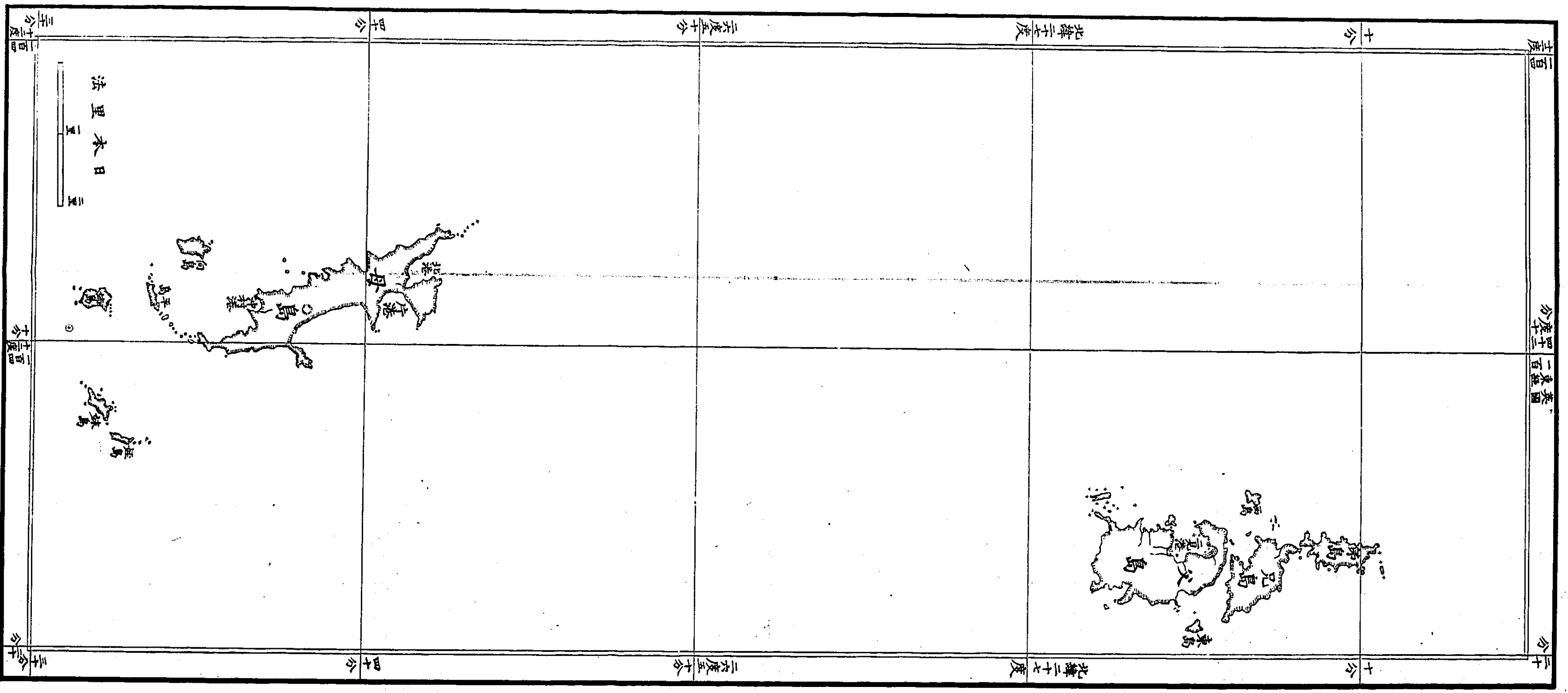
一最早御見分相濟候上ハ一同退散不苦候哉

一勝手次第引取可申一同太義之事ニ候

右よて畢ル

御買上相成代料受取書

小笠原群島之圖



小笠原島

二六五五

小笠原島物産畧記

本島内地ヲ距ル一八度此ニ於テ經緯ノ度既ニ同シカラス
寒温ノ度モ亦從テ同シカラス故ニ其物産ニ至テモ同シカ
ラサル者極テ多シ且小笠原官内カ無人島言上書及ヒ米將
彼理カ日本紀行ノ如キ島産ヲ記スル頗ル其實ニ反スル者
アリ今小花作之助益田鷹之助等ニ問訊シ其概畧ヲ記スル
一左ノ如シ

本島太平洋中ニアルヲ以テ魚蝦頗ル多シ然レモ其土地
狭小ナルカ故禽獸極テ少シ

一鹿

内地ノ産ニ異ナラス

一野豚

海軍歴史 卷之二十一
牙ヲ生スルコト野猪ノ如キ者アリ然レモ其源豚ノ野生セ
シモノナルヲ以テ嘗テ猛獐ナラス獵犬ヲ率ヒテ之ヲ狩
ル容易ニ之ヲ得ヘシ味豚ニ異ナラス
母島北港最野豚多シ水野筑後守巡島ノ際一日四頭ヲ得
タリ小花作之助等島ニアリ亦家豚數十頭ヲ放テリ今日
ノ繁殖想フヘシ

一野牛

羊ノ一種ナリ臭氣アリ諸島皆多シト雖モ野牛島兄島ヲ
最トス

一飛倉トリス

俗稱ノナスマ蝙蝠ノ一種ニシテ翼三尺ニ及ヘル者アリ

一鼠

水陸山野各處極テ多シ

一猫

山野皆生ス極テ多シ豈造物主島中鼠多キヲ以テ亦多ク
猫ヲ生シテ之ヲ驅ラシムルカ

一鶏

村落山野皆生ス而シテ野生ノモノ最多シ羽毛黑色ヲ帶
ヒ飛翔雉翟ニ異ナラス豈島谷市左衛門等カ放チシ者ノ
繁殖セルカ其後小花作之助等島中ニアル時亦鶏三百五
十隻ヲ放チタリ今日ノ繁殖知ルヘキナリ

一鳩

其形内地ノ産ヨリモ大ニシテ色ハ内地ノ産ヨリモ黒シ
然レモ味ハ内地ノ産ニ異ナラス

一 ヒヨトリ

極テ多シ散彈ヲ以テ之ヲ射黏棹ニテ之ヲ膠ス少頃ニシテ五六十羽ヲ得ヘシ

一 洋鴨

極テ多シ畜テ食用トスヘシ

一 褐鷺

鷺鷥ニ似テ背毛黒褐色能ク海中ニ入テ魚ヲ食ス島民之ヲ名ケテフベト云フ

一 大瑠璃鳥

内地ノ瑠璃鳥ニ似タリ

一 白頂鳥

其名ヲ詳ニセス頂毛頗白シ

一 未詳小鳥

多ク母島ニ産ス形繡眼兒ノ如シ頬邊翼端皆黒色ナリ

一 鷹

一 鴟

一 鳥

一 鷗

一 白鷺

一 鶯

一 鴉

右七種總テ内地ノ産ニ異ナラス

此他禽獸多カラス猛獸鷲鳥ニ至テハ曾テ島中ニ生スルコトナシ

魚鱉介蟲

一 鯨

鯨ニ數種アリ曰マッコ洋名スベリム曰セミ洋名ライト
 曰坐頭鯨洋名ホムベツキ曰小鯨曰鰯鯨其他洋名アリテ
 邦名アラサル者アリ曰ボ―ベツキ長六丈斗曰ヒムベツキ丈四
 斗曰モツスルデツケル三丈斗曰ケレムヒユツス一丈八尺斗曰
 キツレル一丈八尺斗曰フレツキス一丈八尺斗本島諸鯨極テ多シ
 而シテ母島沖村ト平島トノ間鯨魚極テ多シ山上ニ登テ
 之ヲ望ム鯨魚尾鰭ヲ以テ波浪ヲ撃ツ音數里ノ外ニ聞フ

一 黒鯛

一 鱒

- 一 松魚
- 一 カサコ
- 一 鱒魚

右内地ノ産ニ異ナラス

此他少ク内地ノ産ニ異ナル者アリ全ク内地ノ産ニ比類
 ナキ者アリ内地ノ産ニ異ナル者ハ一二ヲ左ニ抄録スト
 雖モ全ク内地ニ比類ナキ者ハ圖畫ニアラサレハ之ヲ詳
 記スヘカラス之ヲ要スルニ本島太平洋ノ中心ニ位スル
 ヲ以テ魚蝦頗多ク暫時ノ垂釣ニ鱗屬一擔ヲ得ヘシ最大
 魚ハ拾五六尋ヨリ二十四五尋ノ深處ニアラサレハ得ヘ
 カラスト雖モ小魚ニ至テハ六七尋ノ淺處ニシテ之ヲ得
 ルヲ容易ナルヘシ總テ沿島ノ海水清鮮鏡ノ如ク水底ヲ

洞視スヘシ故ニ魚類多ク沙地ヲ避ケテ岩石ニ就ク船ニ乗シ碇ヲ下シテ之ヲ釣ルトス

一 鰻

山間ノ溪水ニ生ス大サ六七寸長三尺ニ至ル者アリ然レ其皮肉頗硬ク味美ナラス

一 海鰻

極テ多シ往々耳或ハ牙ヲ生スル者アリ靜悍惡ムヘシ

一 海鰻魚

極テ多シ然レ其形異狀ナル者多ク甚シキハ面目突兀狗喙ノ如クナル者アルニ至ル

一 海龜

是ヲ島中食用ノ第一トス二月ヨリ五月ニ至ルノ間先雌

龜ヲ捕ヘ波上ニ游泳セシムレハ雄龜必來リ孳ス漁夫是ヲ候シテ鈎ヲ以テ雄龜ヲ捕住ス是ノ如クスルト數回一日ニシテ雄龜五六頭ヲ得ヘシ五月ヨリ七月ニ至ルノ間雌龜日没ヲ待テ海濱ノ沙場ニ來テ子ヲ産ス漁夫杖ヲ以テ之ヲ撃チ仰顛セシメテ之ヲ捕フ其之ヲ捕フルヤ膏ヲ絞テ點燈又ハ食用ニ供シ肉ヲ取テ之ヲ煮又ハ之ヲ鹽藏シ甲ヲ製シテ鼈甲ニ代用ス或ハ之ヲ池中ニ放チ不時ノ需用ニ供ス甲ノ徑リ二尺五六寸ヨリ四尺ニ至ル重サニ十四五貫目ヨリ六十貫目ニ至ル者アリ

一 海鼈

大サ海龜ニ同シ其肉食スヘカラスト雖モ其甲ハ厚サ二分乃至三分ニ至リ光澤鮮美海龜ノ比ニアラス所謂鼈甲

ナル者はナリ

一 海老

兄島ニ海老穴アリ落潮ヲ候シ行テ捕フ之ヲ得ル極テ易シ形内地ノ龍蝦ニ彷彿タリ色赤クシテ腕足紫色ヲ帶フ大サ二尺ニ及フ者アリ味極テ美ナリ山溪間亦長脚蝦ナルモノ頗多シ

一 蟹

河蟹アリ海蟹アリ其間内地ノ産ニ似タル者アリト雖モ内地ノ産ト異ナル者多シトス就中白蟹ナル者ノ如キ海濱白沙ニ棲ミ潔白雪ノ如ク足長ク体細ク夜中穴ヲ出テ沙場ヲ羣走ス疾キト飛フカ如シ

一 笠貝

俗ニヨメガサヲト云形笠ノ如シ岩石ノ間ニ生ス徑一寸ヨリ二寸五分ニ至ル味美ナリ

一 六脚貝

細脚六出シテ而シテ曲ル内地比類ナシ
右二貝ノ外形匏ノ如クニシテ大一寸ヨリ二寸計ナル貝アリ又田螺ノ如クニシテ大亦一二寸ナル貝アリ皆美ニシテ茹フヘシ然レモ沿島匏蛤ノ屬ヲ生セス奥村ノ沙濱ニ貝種ヲ下サハ他日必繁茂ニ至ルヘシ
島中蒼蠅蚱蟻小蟻多シ蒼蠅飲食ヲ穢シ蚱蟻衣服米麥ヲ蝕シ小蟻人膚ヲ咬ム厭フヘキノ甚シキナリ

坑物

一 琉黃

南崎ノ東方ナル海岸ノ山上ニ生ス外國人或ハ云之ヲ鑿
リ硫酸鐵ヲ得ヘシト

一白土

同所ニ生ス質甚重クシテ粘膩アリ若陶器ヲ作ヲハ極テ
佳ナルヘシ

一石乳

南島ニ産ス南島ハ全島皆岩石屹立シテ鹿角ノ如シ石乳
其間ニ垂レタリ

一瑤石

南崎海岸ノ山皆瑤石質ヲ含メリ

一磁石

一菊銘石

草木

一蕃薯

根周リ六七寸長八九寸乃至一尺ナルモノアリ内地ノ産
ニ數倍ス味淡泊ニシテ稍薯蕷ニ彷彿タリ島民之ヲ以テ
常食トシ且粉齧シテ之ヲ藏シ母乳匱乏ナルニ當リ煎シ
テ液汁トナシ兒子ヲ養育ス

島民ノ蕃薯ヲ植ル畑ヲ盛ルコ蟻封ノ如ク高サ二三尺芽
ヲ其中ニ挾ム六七月ニシテ根ヲ生ス

一葱

十二月ヨリ二月ニ至ル迄之ヲ植ヘ三四月之ヲ採リ青葉
ヲ去リ其根ヲ洗ヒ乾シ年中ノ食用トス根ハ蒜根ニ似テ
而シテ大ナリ

一 蜀黍

二月是ヲ植四月之ヲ採ル葉實内地ノ産ニ異ナラス乾暴
薑粉湯煎シテ常食トナスヘシ

一 西瓜

其形長ニシテ内地ノ圓ナルカ如クナラス大者長二尺五
六寸周リ四尺六七寸ニ至ル冷液殊ニ多ク風味極テ美ナ
リ内地ノ産ノ及フ所ニアラス
阿部將翁試ニ内地ノ種ヲ移植セシニ風味島産ニ及フコ
能ハサリシ

一 甜瓜

大ナリト雖モ味甘美ナラス内地ノ品ニ下ルコト數等ナリ

一 胡瓜

内地ノ品ニ異ナラス然レモ氣候温熱ニシテ一時ニ繁茂
スルヲ以テ忽凋衰ス

一 蘿蔔

短小ニシテ股ヲ生ス風味極テ苦シ豈其種ノ善ナラサル
カ將々其地ノ沙礫多キヲ以テノ故カ阿部將翁地味ノ佳
ナル所ヲ撰テ内地ノ品ヲ試種セシニ内地ニ異ナルコトア
ラサリシ唯秋冬ト雖モ雪霜ナキヲ以テ播種スレハ則花
ヲ生スルノ憂アリ

一 ヤム芋

形佛掌薯ノ如クニシテ味稍下レリ田園山野皆生ス其大
者ニ至テハ徑リ一尺五寸ニ及フモノアリ

一 澤芋

澤中或ハ溪間ニ生ス根ヲ採テ之ヲ食ヒ莖ヲ切テ泥中ニ
挾入ス十二三月ヲ經テ根ヲ生ス莖葉ヨリ根ニ至ル迄皆
圃^ニ似タリ唯其水中ニ生スルト兒孫ナク味美ナラサ
ルトヲ異ナリトス

一 南瓜

長大ニシテ長一尺五六寸乃至二尺ニ及ヒ圍リ一尺六七
寸ニ及ヒ壺^ニ盧ノ如シ味粗ニシテ内地ノ品ニ比スヘカ
ス

一番椒

田園山野ニ叢生ス高四五尺ニ至リ實ヲ結フ味内地ノモ
ノニ異ナルヲナシ

一 甘蔗

甘漿口ニ滿ツ極テ佳ナリ圍五六寸ニ至ル内地ノ比ニア
ラス

一 芭蕉 洋名ホナハ

花ヲ開キ實ヲ結フ四時絶ス其實極テ美ナリ

一 鳳梨 洋名パイナプル

形ハ萬年青ニ類シ實ハ莖根ニ生ス長五六寸圍八九寸皮
ハ魚鱗ノ如ク成熟スルニ至テ黄色ヲ帶フ味美ニシテ液
汁アルヲ梨子ノ如シ

一 胡橙 洋名オレンジ

秋冬ノ際醇熟ス形橙子ノ如ク味獅子橙ニ勝ルヲ遠シ之
ヲ島中果物ノ首品トス

一 酸橘 洋名レモン

長三四寸圍モ又三四寸味極テ酸シ其肉内地ノ柚子ニ代
用スヘシ其液橙汁ニ代用スヘシ

右ヲ島産トス此外猶雜樹雜草アリト雖モ悉ク記スヘカラ
ス總テ島中ノ樹木ハ其質堅硬ナルヲ以テ試ニ筏ヲ作り之
ヲ水上ニ泛レハ忽水底ニ沈没スルニ至ル

阿部將翁内地草木ノ種子ヲ移セシニ麥ハ忽ニ快熟セリ唯
山鼠極テ之ヲ害シ頗ル防護ニ勞セリ茄子ハ首春是ヲ蒔シ
ニ忽繁茂シ翌春ニ至テ枯レス其間離々實ヲ結ヒ四時絶ル
トナク蕪菁ハ總テ内地ニ異ナルトナカリシ唯米ハ能成熟
シ一年再收ニモ至ルヘカリシニ未タ着手セスシテ歸國セ
リ遺憾ト云フヘシ水ハ地中ヲ鑿ツト數尺ニシテ躍出ス絶
テ鹽氣ナシ且山澗ニ水アリ炎暑ト雖モ嘗テ涸ル、トナシ

然レモ冷ナラス食鹽ハ海潮ヲ以テ之ヲ製スヘシ

蒸氣御船小笠原島々御差廻之義奉伺候書付

大久保越中守

小笠原島々差廻候千秋丸御船并鯨漁船共出帆之義ハ先頃
申上置候然ル處右兩船とも出帆後風様不宜今以豆州田子
浦に碇泊罷在此節之模様ニ而は品ニ寄三月頃迄は同所出
帆も相成兼可申且積込之内追々腐敗いたゞ難用立品くも
出來候趣等右船く乗組之者より申越候然ル處兩船とも米
麥其外在島必用之品く積載有之候ニ付而は於彼島遲着之
譯柄は不相辨諸事手筈相後れ食料等も追々及欠乏差支可
申候ニ付蒸氣御軍艦壹艘食料品積載早く田子浦に向ケ出

帆被仰付差向入用可相成品くは於同所可成丈ケ右御船に
積移く小笠原島に向ケ早く渡航相成候様仕度就而者支配
書物御用出役壹人定役壹人右御船に爲乗組差遣候様仕度
奉存候伺之通被仰渡候ハ、其段御軍艦奉行に被仰渡可被
下候依之此段奉伺候以上

戌二月

覺

伺之通可被取計候事

御軍艦頭取

矢田堀景藏

御軍艦組

塚原銀八郎

堀貞次郎

小笠原賢藏

香山道太郎

小杉雅之進

西川寸四郎

荒井藤次郎

石渡榮次郎

砲術方御雇

齊藤留藏

御軍艦操練所稽古人

市川 慎太郎

御軍艦取調役

中澤 又十郎

同下役

岡本 保藏

前件ノ故ヲ以テ右人員朝陽丸に乗組同年二月二十日品川出帆神奈川港碇泊同廿二日同所出帆浦賀着三月朔日同所出帆同三日豆州田子浦着同九日同所出帆同十七日小笠原島入港同月廿四日同所出帆四月十一日江戸着然ルニ復移民輸送ノ命アリテ同年六月再度同艦ヲ發遣ス

朝陽艦小笠原島々再行之記事

小笠原島開拓ニ付八丈島ヨリ同島土民共移住可爲致トノ議ニ決定ス因テ軍艦頭取初メ役々朝陽丸に乗組相越ス可キ旨被命前件ニ付頭取ヨリ如左伺書差出ス

朝陽丸小笠原島々再航ニ付取計方之義伺出候書付

伴 鐵太郎

一朝陽丸御船八丈島に着岸之節者潮時を見計ひ直チニ他向役々上陸いぬ候様取計可申義ニ候得共右島地役人共に同所海岸之様子承り合候處素より北海岸之方ニ者絶壁而已ニシテ壹も繫泊可致場所無之南之方ニも纜カニ有之趣申聞ケ候得共天氣模様宜敷風之節暫時船繋り可出來位之事ニ而是頃より老重モニ南風吹き候時節ニ候間右役々上

陸島民移住之説論中抛錨致し居候義者迎も難相成去りと
て其最寄りニ漂ひ候義も風様ニ因り危難之程測り難し就
て之時宜ニ寄り豆州邊之港ニ乘戻し右諭し方相濟候日限
迄相待ち可申心得ニ御座候尤先日申上候通り都合次第同
島海岸等測量可致節者乗組之内兩三人上陸止宿爲致候義
も可有之何レニも私義者始終御船ニ罷在候様可相心得候
哉

一移民乗組候ハ、水夫部屋之内間仕切いゑし一纏ニ集り居
候様可致尤水夫火焚等万一彼民等と不都合之義出來候様
ニ而者航海之差支ふも可相成間嚴敷右取締向相立て置度
都而外國方御勘定方之内ふて取締致し候義ニ候哉夫も餘
り多人數相成候而者其場所も無之種々差支不尠候間定員

乗組之外佗向乗組之義ハ役々并移民等總括候而人數三十
人々限り候様仕度奉存候

一先般咸臨丸御船小笠原島ニ御廻し之節同島嶼沿岸深淺測
量遺脱有之趣ニ付入港次第直ニ投鉛測着手候積り候得共
風雨等ニ而外役々御用濟迄ニ出來兼ホ猶殘餘之分も有之
節者一兩日之處ニ候得者出帆相延へ候義も可有之候間其
段豫免外支配向ニ御達し被置候様仕度候

一右御船時機ニ寄り八丈島より小笠原島迄再度可相越との
義ニ候得共自然御用向手間取れ時季も後れ颶風之模様ニ
而乗寄セ難キ節者直ニ豆州邊迄乘戻し候義も可有御座候
此段申上置候

右之外定式航海之義ハ從前之通相心得其餘臨時差懸り候

義者取計置き追而歸府之上申上候様可仕と存候右廉々奉
伺候以上

戊五月

右伺之通指令あり

文久二壬戌年六月十八日 西洋一千八百六十二年晴
第七月十三日日曜日

本船南海諸島に航行ニ付此日午前迄ニ左之人員乗組ム

軍艦頭取

伴 鐵 太郎

家來一人

軍艦組

根津 欽次郎

運用

石渡 榮次郎

吉田 八右衛門

小笠原 賢藏

測量

西川 寸四郎

上原 七郎

岡田 井藏

機關

高橋 榮司

小杉 雅之進

砲術

關川 伴次郎

加藤 安太郎

勘定方

望月 七平

醫師

安井 春潮